

公開シンポジウム

熊野参詣路の庶民扶助について On Aid to the Common People Making the Kumano Pilgrimage

鈴木景二
Keiji SUZUKI

The Kumano Shrine, located near the southern tip of the Kii Peninsula, offered salvation to all pilgrims, without regard to rank or gender. Based on this, the idea of mutual aid among pilgrims was born, and it became possible for common people and those with physical handicaps to come from great distances. In ancient times, great importance was attached to purity, but from the medieval period this attitude was gradually overcome by the force of the belief in the nenbutsu, or recitation of the name of Amida Buddha, and even people who had suffered from discrimination because they were thought to be unclean were able to make the pilgrimage. Although the time and the content of beliefs were different, the Shikoku Pilgrimage was similar in that common people and those who suffered from discrimination could participate and that a religious system (settai, or "hospitality") supported them. This was based on Buddhist thought, but it seems to be something fundamental to human society on a deeper level and poses a question to contemporary society.

はじめに

熊野三山への参詣いわゆる熊野詣は居住地と聖地との往復であり、巡回する四国遍路とは異なる形式である。また、それが成立した時代も異なっている。しかし、庶民がそれぞれの願いを持ち救済に預かるために、遠路はるばる参詣したという点は共通している。旅費などを十分に調達できたとは思えない人びとは、いったいどのようにして参詣することができたのだろうか。

こうした観点から、同じく庶民の巡礼として知られる熊野参詣について、かつて検討した内容（鈴木景二「庶民の熊野詣の諸問題」『密教文化』第218号 2007年）をもとに報告し、四国遍路についても言及してみたい。

熊野参詣の特徴としてよく語られるのは、以下のような点である（五来重『熊野詣』1967年 講談社学術文庫など）。

- 1) 参詣者相互の扶助の思想があり、これによって庶民や体の不自由な人も遠路の参詣が可能となったこと。
- 2) 『一遍聖絵』の熊野成道の話で有名なように、浄不浄を問わずに参詣者を受け入れるということ。
- 3) 修験の霊場でありながら、他の霊山と異なり女性の参詣を受け入れること。

これらについて、以下、順に見ていくこととしたい。

1、互助の思想

熊野における相互扶助の思想がみられるのは、永観二年（九八四）に源為憲が著した『三宝絵』の十一月、熊野法華八講についての説明である（戸田芳実「巡礼の道・民衆の道」戸田芳実編『中世の生活空間』有斐

閣 1993年 参照)。そこでは、十世紀の熊野の様子が「山カサナリ、河多シテ、ユクミチハルカナリ、春ユキ秋来テ、イタル人マレ也」とされ、都人にとって僻遠の地としてイメージされていた。山のふもとに居るものは木の実を食べ、海辺に居る人は魚を取って生活しているという。そこで法華八講が開催されるときは、「四日ノ壇越・執行ハ、タダキタレル人ノススルニシタカフ。八座ノ講師・聴衆ハ、アツマレル僧ノツトムルニマカセタリ」と、講師・聴衆ともその場に集まった人がそれぞれを分担し、袈裟も裳も調えないで、鹿皮、蓑を着ていた。その人々は「貴賤ノシナヲモエラバズ、老少ヲモサダメズ」としている。同じころの修行者の歌集『いほぬし』にも、同様の熊野の状況が記されている。都から遠く、到達することが困難な地域であり、参詣するのは山伏や修行者といった宗教者であることから、世俗の秩序を離れ身分の上下を問わない状況が生成されていたらしい。さらに『三宝絵』では、熊野参詣の功德について、『賢愚経』にもとづいて次のように説明されている。すなわち同経巻四に「仏五施」として「トヲクキタレル人ニ施スル」「遠サル人ニ施セル」「ウエツカレタルモノニ施スル」「病セルモノニ施スル」「法ヲシレル人ニ施スル」が説かれており、熊野での施僧の場は、これらを満たすものであるという。はじめの二項目は、熊野へ往復を果たした者への施し、以下、道中で飢えた者への施し、病で足の腫れた者への施し、経を読み呪を誦する者への施しに対応するという。したがって、熊野で施しをおこなう壇越が得る功德は計りしれないというのである。ここでは、飢え疲れながら熊野へ往復することが修行として解釈され、それを助ける人もまた功德をうるという原理が、経典によって根拠付けられている。八講の壇越・執行が互選であったように、施す側と施される側は入れ替わり自由で、苦行と援助がセットとなって相互扶助となるという原理を、経典によって思想的に裏付けていたことになる。また、『優婆塞戒経』の次の部分をも引用している。「菩薩ハモノヲホドコス時ニ、善悪人ヲイハズ、貴賤種ヲエラバズ、ウクル人ヲモアラキコトバニテノラズ」。仏教における平等性が説かれた部分であるが、これもまた熊野における平等を理論付けるものである。このような経典による説明によって現状が作り出されたとみることがおそらく誤りであって、現状に該当する経典該当部を当てはめたものであろう。原初的に、身分を問わない修行者の相互扶助が存在したと考えることができる。こうした発想は熊野固有ではないであろうが、熊野の場合は古い史料によって確認できるのである。

これまでたびたび指摘されてきたように、院政期の貴族の熊野参詣記録には、食料のなくなった人たちに対して貴族が施しをした記録が見られる。藤原宗忠『中右記』天仁2年(1109)十月の記録には、増水した日高川を渡れずに河岸にいた女房2、3人に馬を遣わして渡してやり、菓子などを贈ったことや、岩神峠の王子社では、田舎から参詣にきた目の不自由な人が食料が尽きて困っていたので、食料を与えたことなどが記録されている。くだって建仁元年(1201)十月の藤原定家の後鳥羽上皇熊野参詣随同行の記録には、紀伊国松代王子に子供を抱く目の不自由な女性がいたことを書き残している(『熊野道之間愚記』『明月記研究』第11号 2007年)。この例は参詣者であるかどうかかわからないが、体の不自由な庶民がいたらしい。古く隠棲・修行の地であった熊野へ、治病、特に眼病治癒を目的とした参詣がおこなわれていた。そうした多様な身分の人たちが熊野へ参詣できた理由の一つが、上述の施しの功德にもとづく相互扶助の考え方であったらしい。『古今著聞集』には、神社側がそれを勧める動きのあったことを示す説話が残されている。熊野参詣を企てた徳大寺実能が四国の荘園から召し寄せた人夫の中に、熱心な熊野信者がいた。彼は熱心に「ただ御功德に食料だけは与えてください。何でも奉仕いたします」と頼み込んで随行を許された。そして彼は、率先して同行者の垢離(こり。禊ぎの意)の際の水汲みの奉仕をし、皆から「こりさほ」と呼ばれたという。かくして本宮に着いた実能の夢に権現が現れ、「あなたは、大臣の身で藁沓を履き徒歩で参詣したことを大きな功德と思っているでしょうが、それは熊野の習いで院も宮も同様です。わたしは、こりさほだけがいとおしくおもう」と述べたとされている。この説話には熊野社の意図が表れている。身分に関わらず歩いて参詣すべきこと、参詣にともなう垢離が重要な要素であること、参詣者へ食料を与えることや奉仕することが

大きな功德となること、などである。つまり参詣者が身分を離れて自ら苦行を果たして参詣すべきこと、参詣者にたいして、食料を与えたり奉仕をすることが、大きな功德となると主張している。この話がどのように生成されたのかは分からないが、貴族にこうした原理を周知させ、自力のみでは参詣の難しい庶民を招致しようとする神社側の働きかけがあったことを推測できよう。

2、穢れの許容

熊野三山の先駆的研究をされた宮地直一氏は、その特殊性として参詣に際しての精進潔斎を重視するということを指摘されている（『熊野三山の史的研究』 1954年）。貴族の参詣記を読むと、参詣予定を立て出発前から嚴重に精進を行い、その指導は修験者である先達がおこなっている。したがって精進潔斎が重視されるようになったのは、このような修験者の影響による。しかし史料を見ると正反対の事実も見られ、熊野は他に比べて触穢に関する制限が緩やかで、また重服を忌まないという面がある。宮地氏は、精進潔斎を推進するのも穢れや重服を許容するのも先達であるから、先達が庶民の参詣者を集めるために臨機応変に対応した結果、徐々に厳格な精進がくずれ、やがて寛容な受容性を持つにいたったと解釈された。

熊野の触穢との関係については、近年、阿部泰郎氏が検討されている（「熊野考」『聖者の推参』2001年）。熊野には不浄・女性を排除しない万事平等なるべしという霊地としての性格のあること、道中の潔斎と、穢れとの遭遇の物語は、試練をへて熊野の聖性を顕わし出すものであろうこと、などを述べられている。

こうした点について触れた史料で古いものは、『長寛勘文』（群書類従所収）であろう。そこでは伊勢神宮との比較によって、次のような熊野の特長を述べている。すなわち伊勢神宮は私の奉幣を禁止し仏事を忌避しているのに対して、熊野は庶民を嫌わず、緇徒つまり僧の参詣を受容するという。この点では熊野は参詣者に寛容にみえる。阿部氏が紹介された鎌倉時代後期の写本が残る『熊野三所権現金峰山金剛蔵王』（真福寺善本叢刊 第10巻）には「熊野三所権現参詣事」という項目があり、精進の作法は「男女を弁ぜず」、「上下を嫌わず」、「万事平等にすべし」と記し、道中怠ってはならないということが書かれている。ここで注意されるのは、阿部氏が指摘されたように、男女の性別および身分の上下を問わないという平等性が見られることである。平等性は前節で見た『三宝絵』にすでに見られたが、男女を区別しないという点は重要である。各地で女人禁制が成立してくることとの関係が問われるところである。いっぽう、この史料自体が、精進潔斎の作法について書かれており、精進を必要とするということが前提になっているように、まだ穢れを許容するという発想が見られない点も見落とせない。

熊野は平等に庶民を受け入れるという状況にあり、相互扶助の習慣もできていた。ただし熊野社の方針として、参詣者には精進潔斎による清浄性を要求していたのである。『古今著聞集』の説話で、潔斎の水汲みが苦行として讃えられたこともそれゆえであろう。

ところが鎌倉時代後半から、熊野参詣は精進を必要としないという考え方があらわれる。『一遍聖絵』の物語によれば、一遍は高野山から熊野へ参詣し、山中で僧に出会って念仏札を渡そうとするものの拒まれる。しかし、彼はなかば強引に押し付けてしまい、そのことが気になったまま本宮に参籠した。そして夢に、熊野権現の化身と思われる行者が現れて一遍に次のように語ったという。「信不信をえらばず、浄不浄をきはらず、その札をくばるべし」と。この言葉は、時宗においては浄不浄を問わないということ、阿弥陀如来の救済には不浄も問題とならないということを宣言している。そのかぎりでは一般的な浄土教についての言説である。しかし、この託宣の結末が阿弥陀如来を本地仏とする熊野本宮の証誠殿の祭神によって証されたことは、熊野権現も穢れを忌避しないという主張になるのである。この絵巻において、熊野権現と思しき人物の姿が、衣冠束帯や僧形ではなくことさらに山伏の姿に描かれていることも偶然ではあるまい。当時の熊野

三山が修験者によって支配経営されていたことを象徴するとともに、その山伏の象徴ともいうべき権現によって、阿弥陀如来の救済は不浄を忌避しないことが宣言された、という設定になっているのである。

女性の参詣自体は前述のごとく行われたが、月の障りが血の穢れとして問題とされたらしい。しかしこの点も、熊野権現の夢告によって許容されたとする考えが流布していたことが、次の『風雅和歌集』（新編国歌大観）にみられる和泉式部の和歌から判明している（鶴崎裕雄「熊野と和泉式部・小栗判官—熊野学、学際的展開の期待—」『国文学 解釈と鑑賞』通巻869号 2003年）。

もとよりも塵にまじはる神なれば月の障も何かくるしき

是は和泉式部熊野へまうでたりけるにさはりにて奉幣かなはざりけるに

晴やらぬ身のうき雲のたなびきて月の障りとなるがかなしき

とよみてねたりける夜の夢につげさせ給ひけるとなむ

以上のように、穢れを厭わないという熊野の特徴は、時衆などの念仏系行者の努力によって歴史的に作りだされてきたものであると考えられる。

3、親鸞伝における熊野参詣と穢れ

覚如が著した親鸞の伝記『善信聖人絵』（1295年）のいわゆる熊野の平太郎の物語は、如上の問題に関わるものである。専修念仏の徒である常陸の平太郎という庶民が領主の熊野詣に随行を命じられたさい、熊野参詣が自力による信心、神祇への拝礼を行うことになることを心配し親鸞に相談したところ、親鸞は、自身の発起ではないし熊野の本地は阿弥陀であるから差し支えないが、強いて精進をしないようにと指導した。そこで平太郎は道中の作法も気にせず、不浄をも禁じないで参詣し参籠したところ、夢に衣冠束帯の熊野権現が現れて、「なにゆえ私をないがしろにして穢れたままで参詣するのか」と咎めた。ところがそこに親鸞が現れて「彼はわたしの教えによって念仏するものです」といったところ権現は敬礼してそれ以上何も言わなかった、という。この説話は、熊野信仰と初期の浄土真宗がともに広がっていた関東地方において同じような問題が頻発し、それに対して覚如が提示した回答であろう。真宗では、神社へ参詣しない、穢れを忌避しない（精進潔斎をしない）という考えがあり、この二点と熊野参詣を両立させる必要があったのである。このうち神祇の問題は、熊野権現は本地仏の阿弥陀如来が垂迹した神であるということで解決をはかった。これに対して、穢れを忌避しなくても差し支えないという主張は、『一遍聖絵』とおなじように夢の中での親鸞の登場と熊野権現の黙認という方法によってしか解決できなかったのである。親鸞の絵伝において権現が衣冠束帯で描かれているのは、神祇一般の問題として抽象化され、他の神社の場合にも通用することを示すのであろう。当時の庶民が精進をせずに参詣することを熊野社は容易に受け入れなかったこと、それに対して真宗側も論理的に説明ができなかったことが読み取れるであろう。女性を受け入れ身分の上下を問わない平等性は清浄性と両立するものであったが、精進潔斎を重んじる点は、穢れと両立できなかったのである。

中世後期の成立とみられる親鸞伝記の異伝『親鸞聖人御因縁』（真宗史料集成 第7巻）に記される平太郎の話は、穢れの問題が強調されている。平太郎は参詣途上で精進もせず、また昼・夜の食事を道で逢った飢えた人に与えていた。これは、熊野参詣における相互扶助に基づくものであるが、清浄な火で調理した食事をそうでないかもしれない人に与えたことが問題となり、主人は彼を激しく叱りつけた。平太郎は、先達に対して「皆さんが召し上がっているものを、ハエなども食べているではありませんか」と笑って答えたという。つまり、いくら清浄な食事といっても、穢れたハエがたかって食べているではありませんか、と矛盾を突いたのであり、これを聞いて先達も参詣者も一同に笑って解決した。それ以来、「熊野参りにはハエでも人を助ける」というのであるとしている。この言葉はどのような人たちが言い出したか分からないが、

「ハエですら」という語感からは相互扶助を推奨しようという動きのあったこと、逆に言えば相互扶助が機能しない場合もあったことを暗示している。合火の忌みの観念の成立は、道中の食料についての相互扶助の存続を危うくする問題であった。そしてこのあと、やはり熊野権現みずからが穢れを忌避しないことを述べ、「いやしきも清きも今は押しなべて 南無阿弥陀ぶというは仏ぞ」という歌をよんだという。

熊野参詣における穢れの許容は、長いせめぎあいによって開かれていったのである。説経節『小栗』に表現されるハンセン病患者の熊野参詣と湯峯温泉における療養も、その延長線上にあると推定される。

4、四国遍路の場合

庶民による四国遍路が盛んになるのは江戸時代であり、熊野の事例と直接には比較できないが、庶民の参詣をサポートするシステムが成立していた点は共通している。熊野の場合は参詣者相互の場合が目立つが、史料が貴族中心であるための偏差にもよるのであろうし、山中の行程が長く補助をするべき集落が少ないことも関係するであろう。

遍路へのサポートとは言うまでもなく接待である。参詣者相互よりも沿道の住民による扶助であることが多いようにみえるが、熊野も遍路も、原理としては参詣者を補助する施者はその行為によって功德を積み、とされている。

遍路は修行者によって始まったとされるから、彼らへの援助が功德となるという考えに基づく施与が行われた可能性はあるが、現在のところ確証はない。降って近世の遍路盛行に寄与したとされている真念によって、元禄3年(1690)に刊行された『四国遍礼功德記』(四国遍路記集)には、遍路人に宿を貸し接待していた信心深い夫婦の家が、大師の利益により近所の火災にも焼け残ったという、接待を促進させる意図を含む霊験譚が書き留められている。

また、同書には女性などについての説話も見られる。若い女性が病氣完治の御礼の遍路に旅立つに際して、「わかき身にて不浄もあり」ということを心配したが、遍路中は月の障りもなかったという。真念は「かならずわかき女にても遍礼中にはけがれなしといふ」と記している。女性の遍路を促進しようという意図が読み取れる。ただし、月の障りをも受け入れるという方向へ打開しようとした熊野とは異なり、女人禁制の札所もある四国遍路では、月の障りが功德により回避されるという解釈であり、信仰の差異がうかがえる。

さらに、ハンセン病患者が遍路の功德によって治癒したという話や、「悪病人といへども阻む事な」く宿をかした奇人な人の説話も見られる。この点においても、熊野と共通の課題があったことが見て取れるであろう。

ハンセン病と熊野参詣および四国遍路の問題については、服部英雄氏(『峠の歴史学』2007年)が古道との関係から追究しているように、大きな課題である。

む す び

熊野参詣と四国遍路を比較してみると、長距離の困難な参詣路をたどるという苦行によって救済への手がかりを得ようとする庶民に対し、それを可能とし維持しようとするシステムが曲がりなりにも成立している点は共通している。それは、仏教思想によって基礎付けられているが、根底には人間社会に共通する根源的なものがあるようにも感じられる。その歴史的基盤を考えることは、現在とこれからの社会を考える上でも意味のあることであろう。